

じっきょう

地歴・公民科 資料 No. 98

もくじ

巻頭	第一次世界大戦と兵士 —何故に彼らは4年間も戦い続けられたのか— 東海大学文学部客員教授 鍋谷 郁太郎…………… 1
論説	荘園研究の現在地と教科書記述 慶應義塾高等学校教諭 高橋 傑…………… 10
授業実践「公共」2年目の現状と課題	東京都立篠崎高等学校教諭 滝田 大樹…………… 16
授業実践「公共」の授業デザイン	—ICT活用や時事の扱い方を中心として— 神奈川県立希望ヶ丘高等学校教諭 張江 雄司…………… 20
図書紹介	…………… 24

巻頭

第一次世界大戦と兵士 —何故に彼らは4年間も戦い続けられたのか—

東海大学文学部客員教授

鍋谷 郁太郎

I. 前提

第一次世界大戦（1914年7月28日～1918年11月11日）は、人類史上初めての長期消耗戦＝総力戦となった。参戦国33か国、動員兵士約7,000万人、戦死者約1,000万人、身体障害者約2,000万人。使用した戦費の総計は、1914年のアメリカ国家予算の256倍にあたる1,860億ドルにも及んだ。7,000万人の動員兵士を待っていたのは、もはや牧歌的な一騎打ち機動戦ではなく、「工業化された戦争」であった。この4年間において、原子爆弾以外のあらゆる高精度の大量殺害兵器が開発され、強化されていく。大口径榴弾、榴散弾、マシンガン、手榴弾、機雷、火炎放射器、飛行機、潜水艦そして戦車等である。1人の兵士は、虫けら同然に殺害されるか、身体障害者にされていった。この論考では、そのような極限状態で何故4年以上に亘って兵士が戦い続けたのか、あるいは戦い続けられたのか、について西部戦線を中心に考えて行きたい。

この問題を考える時、次の2つの事実を認識し

ておく必要がある。1つは、第一次世界大戦が1914年7月28日にオーストリア＝ハンガリーとセルビアの第三次バルカン戦争から始まった時に、4年以上に亘る世界大戦になるとは政治家も軍人もそして一般国民も想像していなかったということである。彼らが持っていた戦争のイメージとは、短期決戦という19世紀的な戦争観であった。戦争が落ち葉の散る頃には終わる、というのが共通認識だったと言える。もう1つは、戦争が人々の予想を裏切る形で長期消耗戦化していく中で、主要参戦国は泥縄式に新しい戦争形態である「総力戦」システムを構築していったということである。「総力戦」という言葉自体が、戦争の中で作られて行く。「総力戦」とそれ以前の戦争の最大の相違は、前者において前線（front）と国内（home）の境界が溶けてしまうことだ。民間人が軍事工場動員や農村動員などの形で戦争に組み込まれ、「武器を持たない兵士」になり、国内が「国内戦線（銃後）（homefront）」と変化していった。それにより、それまでの戦争

では禁止されていた民間人への攻撃や殺害が多発していくことになっていった。「総力戦 (la guerre totale)」という言葉は初めて使用したのは、フランスの右翼ジャーナリストであるレオン・ドーテ (Léon Daudet) であるとされている。彼は、ドイツ軍によるパリ空爆を見て、この言葉を初めて使った。つまり、兵士だけでなく、民間時への無差別攻撃を表現する概念として、この言葉を編み出したと言われている。

II. 「戦争文化 culture de guerre」

何故に、兵士が自分たちの想像を超えた長期消耗戦争に4年間も「耐え抜く endure/durchhalten」ことが出来たのであろうか。19世紀における国民統合によってナショナリズムや愛国心が民衆の間で形成されていたという指摘は、その答えにはならない。何故なら、凄まじい総力戦を戦い続けることと、ナショナリズムや愛国心を感じることとの間には、幾重にも質的なギャップが存在するからである。この間に媒介項が入った時に、初めて両者は繋がっていく。

フランスの歴史家は、1990年代にこの媒介項として「戦争文化 culture de guerre」なる概念を提起した。この「文化」とは「心」を意味し、「戦争文化」とは「敵を憎む心」のことを指す。彼らは、フランス人兵士が4年間前線で戦い続けたのが、この「敵を憎む心」が開戦と同時に生まれたからだと説明する。プロバガンダは「戦争文化」が創り出した表象であり、その重要さを評価しない。「敵を憎む心」が存続したが故に、フランス人兵士は4年間耐え抜けたと言うのが、彼らの論理である。これらの歴史家集団は、「同意学派」と呼ばれることになる。もちろん、この様な「戦争文化」論に対して、激しい批判を展開する歴史家集団も現れた。彼らは、軍や政府による兵士への様々な強制や厳罰主義、あるいは兵士が生まれ育った故郷や家族・親戚からの様々な圧力などを重視し、兵士が4年間戦い続けたのは「同意」ではなく、「強制」からであることを強調する。このような歴史家達は、「強制学派」と呼ばれることになる。両派は、20年間に亘って時には個人レベルでの人格攻撃ま

で含む激しい論争を展開していった。さらに隣国ドイツにおいても、「戦争文化」論を巡ってフランス程ではないにしても、論争が引き起こされていくことになる。

「戦争文化」を考える時に、まず第一に考えなければいけないことは、西部戦線において戦場になったのは、ほぼ100%フランスとベルギーだったという事実である。1914年末で、ドイツ軍によって占領された県は10県にも及び、その面積は国土の3分の1に達した。ドイツ軍統制下に入ったフランス住民は200万人を数えた。ドイツ軍によって都市の破壊、住居の破壊、道路や鉄道などの社会資本の破壊、略奪や強姦などが行われていった。ソンム (Somme) やヴェルダン (Verdun) などに代表される戦場は、フランス国内に西進して来る戦線の最前線であった。一方、ドイツは、国境都市であるカールスルーエ (Karlsruhe) やフライブルク (Freiburg) 等は確かにフランス軍によって空爆の被害を受けたが、自国内が戦場になることは西部戦線においてはなかった。このような一般民衆の戦争体験の相違が、フランスにおいて「戦争文化」論を生み出す背景にあったことは否定出来ない。さらに、1870-71年のプロイセン＝フランス戦争における敗戦体験も、フランス国民の間にドイツに対する一種の復讐感情を生み出していったことも忘れてはならない。第一次世界大戦が終わった時のフランス首相クレマンソー (Georges Clemenceau) は、プロイセン＝フランス戦争に兵士として参加し、敗戦を皮膚感覚で経験した。彼が講和会議を、パリのホテルでなくヴェルサイユ宮殿で開催することを強く求めたのは、この時の敗戦体験であった。

現在において「同意学派」と「強制学派」の間の論争は下火になり、次第に接近と融合が始まっている。つまり、「敵を憎む心」が存在したことが「耐え抜く」前提だが、それは時間的経過の中で様々な戦争体験を通して兵士の間で次第に形成されてきたものであると、両派は折り合ったのである。ここで注目すべきは、「耐え抜く」という行為形態が時間と共にあたかも兵士の心に主体的に生ま

れ、その基底にあるのが「敵を憎む心」であるという論理構造を、「強制学派」も認めたことである。

このような「戦争文化」論に対して、ドイツ人研究者からは以下のような批判が出ている。

① 「戦争文化」を、単に「国外の敵」だけに限定するべきではない。つまり戦争によって確かに国外の敵に対する憎悪は生み出されるが、それと同時に「国内の敵」が発見され、彼らへの憎悪も強く生み出されていく。「国内の敵」とは、兵役忌避者、敗北主義者、裏切り者、戦時不当利得者、戦時投機者、敵性外国人、ユダヤ人、社会主義者といった人々であった。つまり、「銃後」への憎悪の存在が戦争を長期化させ、戦後社会を野蛮化していく。

② そもそも「耐え抜く」という「戦争文化」論が自明とした行為形態自体が、兵士の自発性というよりも、戦争の総力戦化が決定的になった1916年から100以上あった野戦新聞（22の塹壕新聞と88の軍新聞）によって大々的に宣伝されていたものであった。つまり、「耐え抜く」という概念自体、1916年以降軍部によって操作され作り上げられていく概念であった。兵士は、自分の行動パターンを、上から作られていく「耐え抜く」概念に合わせて解釈し、合理化していく。

③ ヴォルフガング・モムゼン（Wolfgang J. Mommsen）によれば、戦場の兵士は情報的に孤立化しており、共通の戦時体験は存在しなかったとされる。戦争とは「暴力（Gewalt）」の発露の場であるが、その「暴力」とは敵の殺害である。これは、唯一全兵士に共通する体験である。そういう事実を前提とすれば、兵士が4年以上も戦い続けることが出来た理由を知るには、兵士が直面した「殺害」と「死」の実相を明らかにする必要がある。暴力論研究者バベロヴスキー（Jörn Baberowski）は、次の様に歴史家を批判している。「歴史家は、暴力の原因や結果ばかり追ってきただけで、暴力のダイナミックさを分析してこなかった。普通の人間を暴力の行使者に変えるのは、理念（Ideen）ではなく、普段は禁止されていることを許す「可能化領域（Ermöglichungsräume）」である。それについて、歴史家はほとんど分析を行っていない」。

以下、これらの3点の視点を念頭におき、ドイツ兵士が4年以上戦い続けられた理由を考えて行きたい。

Ⅲ. ドイツ人兵士の士気

ヘットリンク（Manfred Hettling）とヤイスマン（Michael Jeismann）は、ドイツ人兵士の士気の在り方を、3つの時期に分けている。第1期は、1914年8月から1915年春までを指す。この時期を特徴付けるのは、「熱狂 Begeisterung」である。開戦時の「熱狂」が兵士の間で、まだ継続している。この時期の戦闘行為は、まさに勝利のためのものと兵士は信じ、積極的に戦い続けている。第2期は、1915年春から1917年末である。この時期は、戦争が19世紀的な短期戦で終わる見込みが消え去り、1916年には総力戦体制に完全に移行する。そして、物資の面でも人間の面でも終わりのない消耗戦が、展開されていく。第1期の「熱狂」は消え去り、兵士の間では「義務（Pflicht）」としての戦いを続けるという意識が支配的になっていく。そして、「生き延びる（Überleben）」という意識が同時並行的に出現して来る。ここにおいては、戦闘行為は主体的要素が薄れて、「義務」行為という側面が次第に強くなっていく。更に、勝利のために戦うというよりも、「生き延びる」ために戦うという認識が兵士の間で広まっていく。第3期は、1917年末から1918年11月までの時期である。この時期は「義務」という戦うモチーフも解体化していき、それに代わって兵士の間では「諦念の入り混じった消耗（resignierende Erschöpfung）」が支配的になっていく。この時期においては、もちろん戦闘行為は続いてはいるが、兵士の主たるモチーフは「生き延びる」に移ってきている。その中で、兵士の間では軍紀律や上官の命令に従わない「拒否（Verweigerung）」行動が前面に現れて来る。

ドイツの軍部は、1915年冬頃から兵士の間で「熱狂」が消え去り、厭戦気分が高まってくることに對して非常に強い危惧を抱くようになっていった。軍部は、野戦新聞を使って、「耐え抜く」プロパガンダを大々的に展開していく。これらの新聞に掲載されていた論説のテーマは、「忍耐（Geduld）」、「男らしさ（Männlichkeit）」、「義務」の3つであ

り、その中でも「義務」が最も強調された。1916年にヴェルダン（Verdun）戦とソンム（Somme）戦という「工業化された戦争」が行きついた本格的な総力戦を経験する中で、野戦新聞紙上における「戦い抜く」のレトリックに大きな変化が起こって来る。兵士の「非人格化」や「無傷性」あるいは「不屈性」を前面に出して、兵士を一種の「前線機械」化していくことに「耐え抜く」基盤を見出していく論説が、溢れだした。兵士の象徴に「鉄」・「青銅」・「鋼鉄」という言葉が使用されるようになる。例えば、「鉄のような心」、「鋼鉄のように硬い勝利への意志」、「義務の鉄のような強制」といった表現がそれである。1917年8月以降、ドイツ兵の肉体的・精神的な消耗が激しくなると、「義務」に代わって「意志（Wille）」の力に、野戦新聞は重点をおくようになっていく。塹壕戦で多発する戦争神経症も、「意志」力の不足から来るものとされた。物資の劣勢化から来る戦闘能力の劣化を補うものが、「意志」であるとされた、最高軍総司令部のルーデンドルフ（Erich Ludendorff）は、1918年7月18日のフランス軍大攻勢の際に、ドイツ兵部隊が「勝利への堅固な意志」をしっかりと持っていれば、戦車にも勝利出来たと語った。つまり、強い「意志」さえあれば、戦車にも勝てるとする一種の精神論である。1918年敗戦直前においても、ある分隊の司令官は、次のように勝利に対する「意志」の重要性を語っている。「自己の義務を徹底的に成し遂げようとする堅固な意志は、全ての勇敢な兵士の間で湧き上がってくるものにしなければならない。そうなれば、名誉において、この戦争の勝者になれるであろう」。

このような軍のプロパガンダの中で、下士官ショップマンズ（Jakob Schopmans）は1917年5月15日付の両親宛ての手紙の中で、「兵士は、ずっと涙を流すことを出来ない。鋼鉄のような、いや鋼鉄と青銅のような心を持っているのだ」と書いている。軍のプロパガンダが兵士の思考を規定している1つの事例であろう。

しかしドイツ軍部は、「戦争は人間によって勝てるものであり、機械によって勝てるものではない」

という戦前の思考を、「工業化された」戦争においても根本的に変えなかった。戦争末期においてもドイツ軍部が兵士に期待したのは、機械と同じような、あるいは機械を超えた能力を持つ兵士になることであった。言葉を変えるなら、ドイツ軍部は、「機械化された戦争」ではなく、「機械化された兵士」のイメージを敗戦まで持ち続けたと言える。このイメージは、戦後において、前線兵士の理念形となっていく。

IV. 西部戦線での「殺害」の実相

「工業化された戦争」においては、技術力を駆使して短期間の内に殺傷性のより高い武器の開発合戦が展開されていった。大口径の榴弾や榴散弾、機関銃、手榴弾、地雷、火炎放射器、毒ガス、潜水艦、戦車、鉄製飛行機といったものである。原子爆弾以外の兵器が、第一次世界大戦期に一気に出現してくる。もちろん、榴弾や機関銃のように戦前から開発されていた兵器もあったが、この時期に一気にその性能を高めていった。副曹長フーゴ・フリック（Hugo Frick）は、1916年10月3/4日に家族に出した手紙の中で、次の様に書いている。「これ（ソンムの戦闘）は、もはや戦争ではなく、工業技術力を伴った殲滅（Vernichtung）である。この中で華奢な人間の肉体は、何を意味しているのだろうか」。西部戦線で戦い続けた哲学者エルンスト・ユンガー（Ernst Jünger）も、人が機械を使う戦争ではなく、機械が人を使う戦争であったと、戦後書いている。

西部戦線における月毎の戦死者数（行方不明者数も含む）は、平均して3.5%である。つまり、兵士1000人中戦死者は35人ということである。しかし、時期によって差が大きく、非均一的と言ってよい。戦争勃発時の最初の3か月間が最も多い。1914年8月で12.4%、9月で18.8%という数字が分かっている。また、東部戦線の死者数は、1916年・17年段階で、西部戦線の約3分の1しかない。西部戦線の戦死者の50%は19～24歳の若者で、歩兵（Infanterie）が大半を占めていた。

では、「工業化された戦争」における殺害とは、一体どのようなものであったのか。1917年初めに

における殺害の55%, 1917年以降における殺害の76%は、砲兵 (Artillerie) の榴弾攻撃によるものであった。ヴェルダン戦に限定するならば、榴弾による殺害は、戦死者の80%にも及んだ。榴弾とは、爆発すると外皮金属片が手裏剣の様に高速回転して飛び散り、兵士や動物の身体を切り刻んで死に至らしめる爆弾であり、兵士からは非常に怖れられていた。300ミリの榴弾が直撃すれば、百人以上が即死するか重傷を負い、遺体は消えてしまうとされた。また、榴弾孔である巨大なクレーターが残り、ヴェルダンやソンムの戦場は月面ようになった。現在でもヴェルダンやソンムに行くと、その残存を見ることが出来る。筆者はソンムで、幅80m深さ30mの巨大なクレーターを見て、言葉を失った。

殺害の主たる手段となった砲兵による榴弾攻撃は、遠距離から大砲で撃つので殺される敵兵士の顔を全く見ないで済むという特徴があった。最長で約20キロ先から、撃つことも可能であった。自分が撃った榴弾が如何にして敵兵士の身体を切り刻み、破壊していくのかを、そしてまた彼らの阿鼻叫喚の苦しみを全く自分の目で見ることにはなかった。砲兵の殺害意識は極めて薄く、殺人への精神的抵抗値も低かった。まさに「機械的な」殺害であり、「匿名の殺害戦争」であったと断言出来る。ユンガーは、第一次世界大戦を「砲兵戦争」と表現しているが、それはまさに上記のような意味であった。

第一次世界大戦を通じて、「至近戦 Nahkampf」による敵兵殺害率は、たった1%でしかなかった。「至近戦」とは、ピストルや銃剣あるいはナイフシャベルによる殺害であり、まさに血みどろの戦いである。殺すか殺されるかの究極の個人戦であり、相手の断末魔の顔も死んでいく瞬間も全て兵士は見ることになる。榴弾攻撃とは正反対に、殺害による兵士が受ける精神的ストレスは想像を絶するものがあり、殺害への精神的抵抗閾値は極めて高い。しかし、「工業化された戦争」においては、このような至近戦を兵士が展開することは希になっていた。実際、兵士の手紙や日記を読んでも、自分が直接敵兵士を意図的に殺害した記述

は少ない。例えば、ショップマンズが初めてフランス兵を射殺した記述が出るのは1915年12月8日であり、ユンガーの場合は1916年7月28日である。さらに、志願兵 (1916年12月に将校へ昇進) デイツェン (Ulrich Ditzen) の両親宛ての手紙には、殺害の記述は全く出てこない。西部戦線のドイツ兵達は、主体的で意図した敵兵殺害というものを殆んど行っていないと言える。

確かに、ヴェルダンやソンムにおいて、ドイツ軍は塹壕戦の膠着状態打破のために「突撃」攻撃を始めた。それによって、フランス兵やイギリス兵の顔が見える形での殺害が増えたことは否定できない。また、捕虜殺害もしばしば起こっていることも事実である。第一次世界大戦の捕虜数は800万人から900万人と言われており、全出征兵士の約7分の1に当たる。ユンガーは、捕虜の扱いが状況に左右され、狂気のような怒りや腹立ちが勝った時に捕虜殺害が起こると書いている。兵士マキシミアン・ヤコヴスキー (Maximilian Jakowski) は、1916年9月6日付きの教え子に送った手紙の中で、憎悪や臆病さや狂気などが入り混じって、捕虜を殺すことはしばしばあると書いている。

しかし、全体的に見れば、「工業化された戦争」である第一次世界大戦においては、榴弾や榴散弾あるいはガス弾による遠方からの匿名の殺害が西部戦線では一般的であった。ユンガーは、戦場での殺害の大半が砲兵による遠方からの攻撃によるものであり、歩兵である自分が撃つことが殆どなかったと語っている。

V. 兵士と「死」

西部戦線で戦ったドイツ人兵士は、自分の「死」や「戦友」の死をどの様に体験し、それを如何に受け止めていったのであろうか。それを知る上で、格好の史料がある。2000年に出版された史料集『投げ込まれた。参戦者の記憶の中の第一次世界大戦』である。1990年代初頭に、編集者ヴォルフ・リュデウガー・オスブルク (Wolf-Rüdiger Osburg) による第一次世界大戦で戦った元兵士へのインタビュー記録である。「戦争勃発」、「兵士になった時」、「塹壕生活」、「戦友」など20以上の項目に分

けて、インタビューが行われている。「死」についても、68人の元兵士にインタビューが行われた。もちろん70年以上の時間が経過しており、記憶の修正が行われている可能性も否定できない。しかし、戦場で戦った兵士が「死」をどのように体験し、受け止めていったのかを知る貴重な手がかりである。クラウス・ラッツェル（Klaus Latzel）によれば、兵士の体験は地域・時期・職務などによって様々であったが、「死」だけは共通経験であった。

殆どの元兵士は、榴弾への恐怖を第一にあげている。榴弾片による戦友の残酷で無残な死に方を、多くの兵士は詳細に、時には涙を流しながら熱く語っている。その内容を箇条書きにまとめてみると、以下の様になる。

「榴弾直撃で、戦友の身体が瞬時に蒸発した」。

「今話しをしていた戦友が、次の瞬間に榴弾片で頭や腹をやられて即死した」。

「榴弾片を腹に受けた戦友は、腸が飛び出し血の海の中を痙攣して死んでいった」。

「戦友は、榴弾片で首が胴体から飛んで、即死した」。

「戦友は、榴弾で胸が押しつぶされ、肺が丸見えになって死んだ」。

「中国人の遺体かと思ったら、戦友だった。顔が榴弾片で削ぎ落され、平べったくなっていたのだ」。

「一緒に虱を取っていた戦友が、次の瞬間私を凝視し、口から血を吐いて倒れた。榴弾片が腹に直撃し、即死であった」。

「1分先に歩哨に上がっていった戦友が、榴弾片あたって転げ落ちてきた。腹に大きな穴が開いていた。即死だった。自分が先に上がっていたら、自分が死んでいた」。

「榴弾片で重傷を負った戦友から射殺してくれと言われて、泣く泣くその場で射殺した」。

「榴弾片が当たり、脳や肺がはみ出している戦友の遺体を見て、茹で卵がそれ以来食べられなくなった」。

中には、榴弾体験が自分の生き方を見つめ直す切っ掛けになった元兵士もいた。

「ガスマスクをしていたので、助かった。ガスマスクをしていなかったら、顔面に榴弾片が直撃していた。その後、榴弾孔で這い出せなくなった大鼠を助けてやった。『我々は生かされている。鼠も生かしてやろう』と思った」。

「榴弾が炸裂する中で、私は『何故神はこのようにお互いを処刑なさるのか。我々はキリスト教徒です』と思った。自分の中隊は、自分以外全滅した。自分は、それ以来反戦論者になった。」

さらに注目すべきは、榴弾片による戦友の死が日常化していく中で、それに慣れていき、何も感じなくなっていくことを語る元兵士もいたことである。恐らく、それは後になってトラウマになっていったのではと推察される。

「同じ町出身の兵士が全滅し、戦死に無感覚に段々になっていった」。

「塹壕の中で戦友の戦死遺体に囲まれて食事をとっている。死体に、無感覚になっていった」。

「戦友たちが殺害されていく光景を見ていたが、それをじっくり考える時間がなかった。戦場を離れると、全て忘れた」。

このように、「工業化された」戦争は、西部戦線における兵士に戦友のむごたらしい「死」を通して、極限までの精神的恐怖やストレスを与え続けた。塹壕神経症と言われる精神疾患が、戦争の長期消耗戦化と共に増大していく背景には、榴弾による自己の死のリアルなイメージ化があった。

Ⅶ. 「生き延びる」

1917年秋頃から、ドイツ兵士の間で「生き延びる」ことを主たる目的とする、「拒否」行動が顕著に見られるようになっていった。ここで言う「拒否」行動とは、ツィーマンによれば以下の4つのカテゴリーに分類される。

①自傷行為（Selbstverletzung）

②部隊離脱（Fernbleiben）

③敵前逃亡（Fahnenflucht）

④自発的捕虜化（Freiwillige Gefangennahme）

いずれも、明らかに敵の殺害を拒否することが共通している。それまで、敵を殺害することが「生き延びる」行為を意味していたことを考慮され

ば、兵士による「生き延びる」戦略が質的に変化してきたことが伺える。以下、この4つのカテゴリーを見ていきたい。

「自傷行為」は、兵士が自分の手、腕、脚を自分の小銃やライフル銃で打ち抜き、「本国送還になる銃創」レベルの負傷を作り上げることである。それによって、兵士は長期の前線離脱を手に入れることになる。最初の「拒否」の始原的形態と言えるもので、実は戦争開始時から起こっていた。病氣届と違って、医師による治療が絶対に拒否されないメリットがあり、戦争初期の頃は軽傷でも野戦病院に送られ、そこから本国へ送還されるケースが多かった。大抵は左手の人差し指が選ばれた。除隊後の市民生活に大きな障害が残らないと考えられたからである。軍事裁判においても、この自傷行為は有罪判決を下すには多くの困難が伴った。何故なら、この行為は兵士個人1人で決定するものであり、裁判において「銃が暴発した」と兵士が証言すれば、それ以上の追及は難しかったからである。

銃傷以外の「自傷行為」としては、以下のものがあった。

- ①娼婦を後方で買うことによって、意図的に梅毒などの性病に罹患する。
- ②冬に意図的に軍靴を脱いで、足を凍傷にする。
- ③石油を皮膚に注射することで、細胞組織に炎症を起こさせる。
- ④ピクリン酸を含んでいる火薬を摂取することで、胃腸炎、出血性腎炎、黄疸などを発生させる。
- ⑤火薬を鼻から摂取して、鼻粘膜に炎症を起こさせる

「部隊離脱」は、「自傷行為」に次いで兵士が取った「拒否」行動であった。不許可で部隊から長く離脱する行為である。銃による自傷行為と違って、この行為は軍事裁判で最も多く有罪判決が下された。軍事裁判は、「自分勝手に部隊から離れる」とことと並んで、戦場で部隊から離れてしまった時に再合流を怠る行為も、「部隊離脱」の範疇に入れた。もっとも、全てが計画的だった訳ではない。休暇の限度日数の超過、他の部隊への派遣時

の離脱、野戦病院からの退院時の離脱、前線近郊村落への数日間の「遠出」と言った偶発的で短期的なものもあった。しかし、1916年ヴェルダンやソンムでの塹壕戦の頃になると、明白に計画的「逃亡」が増加していく。1917年以降になると、「部隊離脱」は本格的に増えだし、1918年夏以降になると止まらなくなってくる。これは、バイエルン軍における「部隊離脱」による有罪判決数を見れば、一目瞭然である。1915年は331人、1916年は513人であったのに対して、1917年には前年の3倍以上の1,743人に急増し、終戦の1918年においても1,303人に対して有罪判決が下っている。5年間におけるバイエルン軍の「部隊離脱」による全有罪判決数が3,975人だったことを勘案すれば、実に4分の3が最後の2年間に集中していることが分かる。最高軍司令部は、1918年7月9日にプロイセン陸軍省に、次のような通達を出した。「西部戦線での敵前における許可なしの離脱、臆病な行為、そして服務拒否の増大は、そのような違反に対してしばしば出される軽い判決と結び付いている。そのような行為の増加は、軍隊の規律や攻撃対応能力にとって、重大な脅威となっている。」最高軍司令部が「部隊離脱」急増に如何に危機感を感じていたかが、切実に伝わってくる。

「部隊離脱」を決める唯一の理由は、自己の命への直接的不安であった。離脱を行った兵士達は、上官に対して裁判の審理の中で、明白にそのことを認めていた。彼らは、もちろん離脱を諫める軍人服務規約を何度も読んでおり、離脱が重大な規律違反になることを認識していたにも係わらずである。離脱者は、しかし、部隊が塹壕から休憩宿舎(Ruhequartier)へ移動することを聞くと、直ぐに戻って来た。このことから、彼らが意図的に自己の命のために離脱したことは明らかであった。

「自発的捕虜化」と「敵前逃亡」を区別することは難しいので、ここでは前者も「敵前逃亡」の中に入れて扱うことにする。「敵前逃亡」とは中立国に逃亡したり、自発的に捕虜になることを意味した。許可なく舞台を離れる「部隊離脱」と違い、「敵前逃亡」は兵士にとっても部隊にとっても遙か

に深刻な意味を持ち、また兵士個人は大きなリスクを負った。何故なら、「敵前逃亡」は敵兵士によって射殺される可能性もあり、また逮捕された場合は死刑を含む重罪に処せられたからである。さらに、長期に亘り外国（スイス、オランダ、デンマーク等の中立国）に暮らすことを余儀なくされる可能性もあり、さらに残された故郷の家族に対する社会の風当たりも強くなることも覚悟しなければならなかった。

「敵前逃亡」は、元々ドイツにおける民族少数派であるアルザ＝ロレーヌ人やポーランド人そしてデンマーク人の兵士の間で多かった。彼らは、本来戦うモチベーションが低く、またドイツの軍隊の中で差別的に扱われてきた。それ故に、「敵前逃亡」願望は、一般ドイツ人兵士と比べて強いものであった。しかし、1917年から次第にドイツ人兵士においても「敵前逃亡」を試みる者が増え始め、敗戦色が濃くなる1918年夏以降は急増する。その理由は、「部隊離脱」と同様に自己の命の保全であった。1918年8月31日に、バイエルン第5軍の郵便検閲局報告は、以下の様に記している。「以前は逃亡したいとか、捕虜になりたいという事が手紙の中に書かれていても、それは少数に留まっており、そこから全体への影響は恐れるに足らないものであった。今は、このような発言が驚くほど増えている。このような考えが広まったのは、最近特に激しくなった敵のプロパガンダのせいだけではないようだ」。

実際、西部戦線において、「敵前逃亡」で追跡された兵士の数は、1918年に莫大なものとなっていった。バイエルン第3軍団で見てみよう。7月中旬までにその数は、4万人以上にもなっていた。7月には、毎日約100人が敵前逃亡者として登録されていた。7月から11月までの4か月間余りで、敵前逃亡者の数は、12万人から18万人にも及んだ。西部戦線における全ての敵前逃亡者数は、75万人から100万人にも達した。その大半は、もう一度部隊に戻る意志を全く持たなかったと言われている。

VII. まとめ

これまでの考察をまとめてみたい。ドイツ兵士が西部戦線で4年以上に亘って戦い続けた、あるいは戦い続けられたことを考える際、フランスの歴史学者が提起した「戦争文化」論＝「敵を憎む心」から一端離れてみると何が見えてくるのか。兵士が戦場で直面していく「殺害」そして「死」の有り様を考えていくことが、「戦争文化」を超えてより兵士の心に肉薄していけるのではないか。以下、重要なポイントをまとめてみたい。

まず兵士の士気の変化である。1914年から1915年春までは、開戦時の「熱狂」が残っており、兵士は勝利のために敵を殺害していく。しかし、1915年春以降、戦況が長期化の様相を呈し始めると、「熱狂」は消え去って行く。その代わりに出てくるのが「義務」である。これは、軍のプロパガンダで作られていく面が強く、1916年以降はそれがエスカレーションしていく。この中で、兵士は「義務」として、敵の殺害を行っていくようになる。殺害のルーティン化と言える。さらに、1917年以降になってくると「生き延びる」ことが兵士の間で重視されるようになり、殺害が「生き延びる」とことと結び付くようになる。さらに、1917年末から1918年にかけては、「生き延びる」ために「拒否」行動が多くの兵士の間で試みられていく。そこにおいては、敵の殺害という戦争暴力の全面放棄が出現して来る。

敵の殺害の仕方は、「工業化された」戦争においては、榴弾に代表される「匿名の殺害」が一般的になる。敵の顔が見えない殺害形態が一般的になっていく。敵の顔が見え、返り血を浴びるような「至近戦」は、実に1%しかなくなっていった。つまり、殺人という精神的ストレスの閾値が、極めて低くなっていった。これは、兵士が4年以上に亘って戦い続けられた大きな心的理由ではないだろうか。

榴弾による戦死への恐怖あるいはストレスは、我々が想像する以上に兵士間で強かった。更に、榴弾片によって重傷を負い身体障害者になる恐怖は、戦死への恐怖よりももっと強かった。

参考文献

〔史料〕

- Gerhard Hirschfeld/Geld Krumeich,Irina Renz (Hg.). Die Deutschen an der Somme 1914-1918. Krieg, Besatzung, Verbrannte Erde (Essen, 2006).
- Hans Fallada-Gesellschaft (Hg.), "Sonst nichts Neues." Briefe aus dem Ersten Weltkrieg von Hans Falladas Bruder Ulrich Ditzgen (Friedland, 2017).
- Wolf-Rüdiger Osburg, Hinein geworfen. Der Erste Weltkrieg in den Erinnerungen seiner Teilnehmer (Berlin, 2009).
- Klaus Schopmans (Hg.) "Macht Euch keine Sorge, es geht mir gut ...". Jakob Schopmans Briefe und Aufzeichnungen aus dem Ersten Weltkrieg (Norderstedt, 2014).
- Bernd Ulrich/Benjamin Ziemann (Hg.), Frontalltag im Ersten Weltkrieg. Ein historisches Lesebuch (Essen, 2008).
- German Werth, 1916. Schlachtfeld Verdun. (Berlin, 1994).

〔研究書・研究論文〕

- Jörg Baberowski, "Gewaltverstehen", Zeithistorische Forschungen (Online-Ausgabe), 5-1 (2008), 1-9.
- R. Chickering, "Wann wurde der Krieg total?", in: Cornelia Rauh/Arnd Reitemeier/Dirk Schumann (Hg.), Kriegsbeginn in Norddeutschland. Zur Herausforderung einer >Kriegskultur< 1914/15 in transnationaler Perspektive (Düsseldorf, 2015), 41-54.
- Wilhelm Deist, "Verdeckter Militärstreik im Kriegsjahr 1918?", in: Wolfraum Wette (Hg.), Der Krieg des kleinen Mannes (München, 1992), 146-167.
- Michael Epkenhaus, "Kriegswaffen – Strategie, Einsatz, Wirkung", in: Rudolf Jaun/Michael M. Olsansky/Sandrine Pieaud-Monneral/Adrian Wettstein (Hg.), An der Front und hinter der Front. Der Erste Weltkrieg und seine Gefechtsfelder (Köln, 2015), 69-83.
- M. Epkenhaus, "Die deutsche Armee – an der Heimatfront besiegt?", in: Rolfspikler/Bernd Ulrich (Hg.), Der Tod als Machinist. Der industrialisierte Krieg 1914-1918 (Bramsche, 1998) 40-155.
- Manfred Hettling/Michael Jeismann, "Der Weltkrieg als Epos. Philipp Witkops "Kriegsbriefe gefallener Studenten"", in: Gerhard Hirschfeld/Gerd Krumeich/Irina Renz (Hg.), Keiner fühlt sich mehr als Mensch..Erlebnis und Wirkung des Ersten Weltkriegs (Essen, 1993), 175-198.
- Gerhard Hirschfeld/Gerd Krumeich, Deutschland im Ersten Weltkrieg (Frankfurt a/M, 2018)
- E. Julien, Der Erste Weltkrieg (Darmstadt, 2014).
- Gerd Krumeich/Antoine Prost, Verdun 1916 (Essen, 2016)
- Achim Kloppert, "So muss denn das Schwert entscheiden. Das Kriegsbild und das Heer im Ersten Weltkrieg", in: Michael Hörter/Diego Voigt (Hg.), Verdun 1916. Eine Schlacht verändert die Welt (Münster, 2016), 35-57.

- G. Krumeich, Deutschland, Frankreich und der Krieg. Historische Studien zu Politik, Militär und Kultur, hrsg. v. Susanne Brandt, Thomas Gerhards und Uta Hinz, (Essen, 2015).
- Klaus Latzel, "Die mißgelungene Flucht vor dem Tod, Töten und Sterben vor und nach 1918", in: Jörg Duppler/Gerhard P. Groß (Hg.), Kriegsende 1918. Ergebnis, Wirkung, Nachwirkung (München, 1999), 183-199.
- Jörn Leonhard, Die Büchse der Pandora. Geschichte des Ersten Weltkrieg (München, 2014).
- Anne Lipp, Meinungslenkung im Krieg. Kriegserfahrungen Deutscher Soldaten und ihre Deutung 1914-1918 (Göttingen, 2003).
- Christoph Nübel, Durchhalten und Überleben an der Front. Raum und Körper im Ersten Weltkrieg (Paderborn, 2014).
- B. Ulrich, "Kampfmotivationen und Mobilisierungsstrategien: Das Beispiel der Erster Weltkrieg", in: Heinrich von Stietencron/Jörg Rüpke (Hg.), Töten im Krieg. (München, 1995), 399-419.
- Benjamin Ziemann, Front und Heimat. Ländliche Kriegserfahrungen im südlichen Bayern 1914-1923 (Essen, 1997).
- B. Ziemann, Gewalt im Ersten Weltkrieg. Töten-Überleben-Verweigerung (Essen, 2013).
- B. Ziemann, Veteranen der Republik.Kriegserinnerung und demokratische Politik 1918-1933 (Bonn, 2014).

- ゲルト・クルマイヒ／ジャン＝ジャック・ベッケール（剣持久木・西山暁義訳）『仏独共同通史 第一次世界大戦』上下（岩波書店 2012）。
- 鍋谷郁太郎「ポスト冷戦期ドイツにおける第一次世界大戦史研究」『軍事史学』50-3/4（2015），107-133。
- 鍋谷「第一次世界大戦と『戦争文化 Kriegskultur/culture de guerre』論の射程」『桜文論叢』（日本大学法学部），96（2018），173-192。
- 鍋谷「ドイツ民衆は第一次世界大戦を『耐え抜く durchhalten』たのかー『戦争文化 culture de guerre』・『耐え抜く durchhalten』・『耐える aushalten』についての試論」鍋谷（編）『第一次世界大戦と民間人―『武器を持たない兵士』の出現と戦後社会への影響』（錦正社 2022），44 - 82。
- 鍋谷「総力戦と民間人」同上，3-13
- 平野千果子「フランスにおける第一次世界大戦研究の現在」『思想』1061（2012），7-27。
- 松沼美穂「フランスにおける大戦百周年」『軍事史学』50-3/4（2015），149-166。
- ステファヌ・オードワ＝ルゾー（剣持久木訳）「今日のフランスにおける第一次世界大戦」『軍事史学』50-3/4（2015），134-148。
- ヤエルン・レオンハルト（鍋谷郁太郎／梅原秀元訳）「克服されなかった敗北，台無しにされた勝利。国際比較における戦後社会にとっての第一次世界大戦の遺産」『軍事史学』59-3（2023），108-131。